
蜀犬、日に吠ゆ

野鶴善明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜀犬、日に吠ゆ

【Nコード】

N4981J

【作者名】

野鶴善明

【あらすじ】

三国志の蜀の国、いまの中国・四川省は、雨が続いたかと思えば、うす曇の日々が続き、はたまた霧が立ち込めと、ほとんど太陽がありません。また、今の四川省は激辛料理でも有名です。この四川省の気候と激辛料理について考察した紀行エッセイ。

バックパッカーをしていた頃、八月末から十二月の初め頃まで成都に滞在したことがあった。いわゆるパッカー用語で言う「沈没」で、のんびり日々を過ごした。

僕は、小学校五年生の時に岩波ジュニア文庫の『三国志』（抄訳版）を読んで以来、大の三国志ファンだ。NHK人形劇『三国志』の初放送（！）は欠かさず見ていたし、岩波文庫の『三国志』（こちらは全訳版）も、吉川英治の『三国志』も読んだ。お向かいのおじさんに湖南文山版の挿絵つき三国志を借りて読んだ。大人になってからは、北方謙三の『三国志』にはまり、DVDになったNHK人形劇『三国志』はタバコ代を削って全部そろえた。コーエーのゲームも初代から八代目くらいまで毎回買って、中国大陆を二百回以上、征服した（今から思うと、むだに征服しすぎたと反省している）。

諸葛孔明や蜀の將軍が大好きなので、成都がどんなところなのか、この目で見て、肌で感じてみたかった。

「めっちゃ大都市やん」

それが初めての印象だ。

成都の市街地へ入ったバスは、どこまでもビルの谷間を走る。

実際、成都市は人口一千万人の大きな街だけど、山ばかりで人がまばらな四川省西部のチベット族居住地域を抜けて成都入りしたから、よけいに都会に見えたのかもしれない。

八月の末はまだ雨季なので、一日中雨がしとしとふっている。一瞬やんだかと思うと、また雨が降る。

雨の武侯祠（孔明の祠、劉備の墓もある）や杜甫草堂は、なかなか風情があつてよかったのだけど、困ったのは洗濯物だった。四川盆地一体に湿気がこもっているので、干してから二日経っても乾かない。そのうち、乾ききらない水分が腐ってへんな臭いを放つ。し

かたがないので、洗濯した後はホテルの部屋の扇風機を全開にして、その前に洗濯物をぶら下げて乾かすことにした。これだと二三時間で乾いてくれる。なにせバックパッカーなので、ホテルのクリーニングサービスなんて高くても利用できない。十円、二十円を節約する貧乏旅行だ。

九月の末くらいに雨季が終わり、乾季になった。

だけど、ずっと曇り空が続いてなかなか晴れてくれない。日本でいえばうす曇りの天気が毎日続く。

洗濯物はそこそこ乾いてくれるようになったし、激辛の四川料理にも慣れてきた。四川料理の辛さは、「麻辣マール」と呼ばれる。「麻」は、痺れるという意味で、山椒をたっぷり使うので舌がピリピリする。「辣」は唐辛子の辛さ。初めはとても食べられなかった。痺れすぎて辛すぎて、舌ばかりか、唇や口の間感覚すらもなくなってしまう。だけど、慣れれば四川料理のピリピリ・ヒリヒリ感に中毒になる。なんとなく舌をピリピリ・ヒリヒリさせたくなくて、夜、ふらりと横丁の屋台へ行つては串焼きを買って食べたりする。きのこに山椒と唐辛子をふったバーベキューが好物だった。

はなしをもとへもって
閑話休題。

「蜀犬、日に吠ゆ」
しよくけん

という諺がある。

四川省、つまり蜀の地はなかなか晴れず、太陽をほとんど見ることができない。だから、たまにお日様が顔を出すと、犬が「なんか変な奴がいる」と怪しんで太陽に向かって吠えるというものだ。ここから意味が転じて、浅知恵の者が優れた人物の立派な言行に対して軽率に非難・攻撃することにとえられようになった。テレビに出演しているコメンテーターたちの言動を見るとわかりやすいだろう（もちろん、なかには優秀な人もいるけど）。あるいは、不当な国策捜査を繰り返す東京地検特捜部もこの範疇に入るかもしれない。

三か月すこし成都にいて、快晴になったのはたった一度だけだ。

あの時は、ほんとうに青空がまぶしかった。うれしさのあまり日光浴したほどだった。太陽がこんなに貴重なものだと、思わなかった。だけど、その一日以外は、雨かうす曇。

司馬遼太郎が『街道を行く』のなかで、この「蜀犬吠日」しよくけんはいじつのことを書いている。司馬先生はうす曇の天気を見て、地元の四川人に、

「この天気は晴れでしょうか。それとも、曇りでしょうか？」
と尋ねたところ、

「晴れですよ」

と、こともなげに返事が返ってきたそう。

僕はこの話を確かめたくて、太陽のありかがぼんやりとわかるくらいのうす曇の天気を指しながら友人の成都人に訊いてみた。

「この天気は晴れ、それとも曇り？」

「晴れに決まってるじゃない。当たり前でしょ」

彼女は、なんでそんなことを訊くのかと不思議そうに答えてくれた。

司馬先生の書いた話はほんとうだったんだ。僕はうれしくなった。司馬先生が嘘を書いたとは思わなかったけど、自分の目と耳で確認できて心底納得した。四川人は、うす曇を晴れだと感じている。

十一月へ入って気温がさらに下がると、よく霧が立ちこめるようになった。

ロマンティック、あるいは幻想的な雰囲気なのだけど、湿度が高い分、寒さが骨身にしみる。心底しみる。

インナーを着込んで、ジャンパーを羽織っても寒くてたまらない。ホテルの部屋には暖房がない（中国の長江以南は基本的に暖房を使わない）ので、ベッドへ入ってもがたがた震えてばかりでなかなか寝付けなかった。掛け布団は冷たく湿っぱいし、冷蔵庫のなかにいるようだ。

こんな気候の蜀で劉備を皇帝にするために激務をこなしていた諸葛孔明は、さぞ体を痛めたことだろう。さすがの張飛や趙雲もすこしばかり気分が滅入ったに違いない。

そんな寒くて凍える夜は、激辛料理がいちばん効く。

屋台まで行って串焼きを買いたかったけど、寒がりの僕はとても外へ出られなかったので、ホテルの部屋で激辛インスタントラーメンを寝る前に食べることにした。

こっかてきめん
効果靨面。

体がほくほくしてぐっすり眠れるようになった。

汗もかくので、湿気でだるくなった体もしゃきつとする。

四川人が激辛料理を常に食べるのには、わけがあった。

太陽をなかなか拝めず、雨が降り続いたり、霧が立ちこめたりして、おまけに四方を山に囲まれた盆地なので、その湿気が風で吹き飛ばされることのないじめじめした気候では、体を温め、発汗作用のある唐辛子と山椒は彼らにとって生活必需品なのだ。激辛料理なしでは、彼らは元氣になれない。

それにしても、と思う。

三国志の時代はまだ唐辛子がなかったはずだ。

蜀の諸将はいったいなにを食べて体を温めていたのだろうか。やはり、塩分の濃いものをとっていたのだろうか？

張飛は、酒で温まっていたのだろうか。

塩を肴にして、くびくび酒を飲み干す張飛の姿が目には浮かぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4981j/>

蜀犬、日に吠ゆ

2010年10月8日15時07分発行